

# 「愛の方向と進化形」

弁財  
行

【あらすじ】

杉田明美（35）は、バーのママとして働いている。ある日、弟の虎太郎が、心霊チャンネルの撮影を手伝って欲しいと言ってきた。

テーマは『魔界のエレベーター』。交際相手に捨てられた女性が1人でエレベーターに乗ると、そこで姿が消えるというもの。そして彼女達は半年後、餓死した状態で『変な所』から発見されるのだ。捜索・施錠済の部屋のクローゼットや、実家暮らしであればその家の物置から。手伝いを断った明美だが、その後すぐ客同士のトラブルに巻き込まれてしまう。交際相手を後輩に寝取られた溝口五月、そして寝取った後輩、川内萌絵。この2人の乱闘で店内は滅茶苦茶に。自身のことを「駄目な女」と自虐する五月を、明美は自分なりのポリシーで励ます。

しかしそんな中、萌絵が行方不明に。五月は警察に疑われてしまう。

更に明美も、魔界のエレベーターらしきも

のに閉じ込められてしまう。バーのスタッフ・頼の機転で脱出に成功するも、今度はその間に、五月が行方不明に。

実は一連の失踪事件の原因は、栗原篤の1人目の恋人、丹藤絵麻の霊だった。彼女は自分の恋人だった栗原に近づく女達を攫い、殺していた。絵麻によってエレベーターピットに引き摺り込まれた五月と萌絵。絵麻は2人を殺そうとするが、そこであることに気付く。萌絵が、自分の妹だということに。萌絵は行方不明になった姉・絵麻を見つけるために栗原にわざと近付いたのだという。10年間自分を探し続けてくれた妹に涙して絵麻は成仏する。

その後、栗原は逮捕。会社を辞めた五月と萌絵は明美の店の隣で新たな店をオープン。明美のようないい女になるために、これからはライバルになりたい、と願う五月。負けないわよ、と握手する明美と微笑みあいながら、新しい一步を踏み出すのだった。

【人物関係表】

- ・杉田明美（35）トランスジェンダー女性。
  - バー・カーマデーヴァのママ。
- ・杉田虎太郎（25）明美の弟。
- ・葛原頼（25）トランスジェンダー男性。
  - バー・カーマデーヴァのスタッフ
- ・海堂慎一郎（35）刑事。明美の幼馴染。
- ・芝恭一（30）刑事。海堂の後輩。
- ・溝口五月（35）会社員。
- ・川内萌絵（25）会社員。丹藤絵麻の妹。
- ・栗原篤（35）五月が勤める会社の社長。
- ・丹藤絵麻（25）篤の元恋人。萌絵の姉。
- ・小坂百合子（24）篤の元恋人。
- ・警察官
- ・同僚 1
- ・同僚 2
- ・同僚 3
- ・同僚 4

○オフィスビル・14階・執務エリア（夜）

小坂百合子（24）、スマホを見つめる。

LINEのメッセージ「別れよう」

百合子、バックを乱暴に持ち退室。

同僚達の声が響く。

同僚1「結局浮気されたの？」

同僚2「みたいよ。昨日駅前で他の女とー」

○同・エレベーター内（夜）

駆け込む百合子。他に利用者はいない。

百合子、「閉」ボタンを押す。

エレベーターの扉が閉まる。

百合子、急いで返信する。

以下、LINEのメッセージ。

「いきなりなんで？」

「会って話したい」

「今から会える？」

既読にならず。

百合子、壁を叩く。荒く息をして視線を彷徨わせる。

百合子「（目を見開いて）え」

エレベーターにボタンが1つもない。

百合子「え、なんで、私、押したよね」

百合子、内部を見渡す。

エレベーターがガクンと揺れる。

百合子、尻餅を付く。

バチン、と明かりが消える。暗闇。

○同・正面エレベーターフロア（夜）

フロアは無人。

百合子の悲鳴が響く。

エレベーターが到着。開く。中は無人。

○同・外観（夜）

幾つかのフロアの明かりが点いている。

○タイトル『愛の方向と進化形』

○バー・カーマデーヴァ・カウンター（夜）

賑わう客達。

グラスを拭く杉田明美（35）。

カウンター席に座る杉田虎太郎（25）

虎太郎「ね〜！ お願いだよ姉ちゃん！」

明美「嫌よ、動画撮影の手伝いなんて面倒く

さい」

虎太郎「そこをなんとかさ。グループは解散しちゃったし、1人じゃ大変なんだって！」

明美「大変でも1人でやりなさい。そもそもあんたが始めた仕事でしょ。視聴者の為に頑張るってはりきってたじゃない」

虎太郎「1人じゃ怖いよ！」

明美「じゃあなんで心霊チャンネルなんて始めたのよ！」

虎太郎「そりゃ姉ちゃんに借りたお金返す為じゃん」

明美、額を抑えて溜息を吐く。

明美「借りたお金を返したいなら真っ当に働くのが一番でしょうが。コンビニでもどこでもいいからバイトしてらっしゃい」

虎太郎「実はこの近くに『魔界のエレベーター

ー』っていうのがあってー」

明美「お願いだから姉ちゃんの話聞いて！？」

ワツとざわめきが起こる。

明美、虎太郎、騒ぎに視線を向ける。

テーブル席で揉みあう2人の女。

葛原頼（25）、明美の背後を通る。

頼「ママ、止めてくるね」

明美「危ないわよ頼ちゃん」

○同・テーブル席（夜）

溝口五月（35）、川内萌絵（25）、

揉みあう。

頼、怠そうに仲裁する。

頼「はいはい、落ち着いてください」

五月「うるさい！ 引っ込んで！」

萌絵「わく怖い。先輩そんなだから捨てられるんですよ」

五月「あんたが寝取ったんでしょが！」

五月、萌絵、更に揉みあう。

椅子やテーブルが倒れグラスが壊れる。

明美「やめなさい！ 警察呼ぶわよ、あんた達！」

萌絵「篤さんから言ってきたんですよ！ プライドだけ高いババアの相手うざいって！」

五月「あんただってその内捨てられるんだから！」

萌絵「(笑って)嫉妬怖い！ もう女終わってませんか？ まあそうですね。先輩ババアですもん。可愛げなくてプライド高くて無駄に年だけ重ねちゃった女とか、もうゴミー！」

明美、萌絵にグラスの水をかける。

明美「嫌な女ね。出て行きなさい。終わってんのはあんたの方よ」

萌絵「何すんのよこのオカマ！」

萌絵、明美に掴みかかろうとする。

頼、明美の前に立つ。

頼「聞こえなかった？ 出ていけっつったんだよ。それとも引き摺られてえの？」

萌絵、怯む。舌打ちをして出て行く。

明美「頼ちゃん素敵ー！ 流石あたしの王子様！」

虎太郎「（小声で）こんなお姫様いやだなあ」

明美「聞こえてるわよクソガキ！ さっさと

片づけをおし！」

虎太郎「俺！？」

× × ×

客が居なくなった店内。

椅子に座り項垂れる五月。

明美、テーブルにグラスを置く。向か

いの席に座る。

明美「これお礼よ。片付け手伝ってくれてありがとうね」

五月「……私のせいだし」

明美「半分はね。でもこうなったのはあんたのせいじゃないんでしょ」

五月「わからない……」

明美「そう？ 聞く限りだと、あんた若い子に彼氏寝取られたって感じだったけど」

五月、泣くのを堪えて俯く。

明美「それであんたのどこが悪いの。全然悪くないでしょ。まさかあのクソガキの言う事を間に受けてるの？」

五月「……私が、可愛くないから。プライドも高いし、気も強いし、年だってもう35だし、こんな年になるまで結婚もできなくて、駄目な女だから」

明美「がつつり間に受けてるわね」

明美、グラスを五月に勧める。

五月、涙を拭いながらグラスを持つ。

明美「あのね、正直言って、浮気するような男はクズだしそんなクズを寝取って自慢してるような女もクズよ。なんでクズがあんたの価値を決めてるの？ クズの癖に」

五月、明美を見つめる。

明美「あんたの価値はあんたが決めるのよ。他人じゃないし、ましてクズが決めていいものでもない。可愛くない？ 当たり前でしょ。クズの好みに合わせて生まれてきた

わけじゃない。気が強い？ 結構よ。強さこそ美しいって知らないの？ 35？ だから何よ。35だろうが65だろうが人間に賞味期限なんてないわよ」

虎太郎「肉は腐りかけが一番旨いって言うしね」

頼、虎太郎にボディブロー。

頼「ママ、この生ゴミ捨ててくるね」

明美「ありがとう頼ちゃん。捨てやすいように念入りに畳んでね」

頼「任せて」

頼、倒れた虎太郎の襟足を引き摺りスタツフルームへ。

扉の奥から虎太郎の悲鳴。

明美、五月の持つグラスに自分のグラスを傾ける。

明美「ほら、飲むわよ。いい女の時間はこれからよ」

五月、泣きながら頷く。

○同・スタッフルーム（夜）

壁に寄りかかり煙草を吸う頼。

ドアの隙間から中の様子を見る虎太郎。

虎太郎「心配だなあ、あの人」

頼「言う割にはすげえ揶揄ってたな」

虎太郎「え、俺？ どこが？」

頼「（深く息を吐いて）そうだな、お前ノンデ  
リだもんな」

虎太郎「え、ちょ、ひどくない！？」

頼「（舌打ちして）うるせえ」

虎太郎「酷い……」

頼「で、何が心配だって？ 見た感じ、自殺  
まではしなさそうだけど」

虎太郎「そうじゃなくてさあ、ああいう子が  
ターゲットになるんだよ」

頼「何の？」

虎太郎「（真顔で）魔界のエレベーターの」

頼、残念そうに虎太郎を見つめる。

虎太郎「いやいやいや、なんでそんな目で俺  
を見るの！？」

頼「正直に言えよ。何に手を出したんだお前」

虎太郎「薬なんかやってないって！ 本当なんだって！ 俺も資料集めててびっくりしたんだから！」

頼「何が資料だよ。適当にググってるだけだろうがよ」

虎太郎「ぐ……っそうなんだけどさ、でも過去10年で3人も行方不明になってんだよ！ すごくねえ！？」

頼「普通の数字じゃねえか？」

虎太郎「そうじゃねえの！ 被害者は全員『交際相手を寝取られた子』なんだって！ そういう子が1人でエレベーターに乗ると、そこで姿が消えるんだよ」

頼「監視カメラは？」

虎太郎「いきなりノイズが走って、そのノイズが消えたら女の子が消えてるらしい。んでもって、どの階にも降りた形跡がない」

頼「やらせじゃねえの？」

虎太郎「それを確かめに行くじゃん！」

頼 「1人で行けよ」

虎太郎 「なんでそんなに冷たいんだよ！」

○同・テーブル席（夜）

飲む五月、明美。

スタッフルームから虎太郎と頼の言い争う声。

明美 「まったく、うるさいわねえ」

五月 「弟？ 仲がいいのね」

明美 「手がかかるだけよ。いつになったら独り立ちしてくれるんだか」

五月 「でも独り立ちしちゃったら寂しいんでしょ」

明美 「まあね。ちょっと癪だけど、多分そう」

五月 「羨ましい。私は兄弟いないから、両親がいなくなっちゃったら、多分1人きり」

明美 「……」

五月 「この年で振られるなんて。もう生涯独身決定だし……兄弟がいたら、少しは違ったのかな」

明美「(溜息を吐いて)ちよつと思ひ込み激しいわね、あんた」

五月「え」

明美「先のことなんて誰にもわからないわよ。

あんたの言う通り一生1人かもしれないし、もしかしたらもっといい出会いがあるかもしれない。今はそう思えないかもしれないけどね」

五月「そんなの…多分ない」

明美「多分でしょ。それに、もしあんたの言う通り一生独身だからといってそれが不幸なわけじゃない」

五月「1人なのにな？」

明美「当たり前でしょ。なんで結婚イコール幸せなのよ。どこの時代から来たのよ、あんた」

五月「でも、周りは皆結婚して、子供もいて幸せそうで…」

明美「幸せ『そう』でしょ？ 実際どうなのかなんて当事者にしかわからないわよ。そ

れはあんただって分かってるんじゃないの？　なんで自分を責める為だけにわかってない振りをするのよ」

五月「それは……」

明美「言ったでしょ？　あんたの価値はあんたが決めるの。当然あんたの幸せもね」

五月、俯いて小さく微笑む。

○同・外・路上（夜）

タクシーに乗り込む五月。  
手を振る明美。

頼「送るよ、ママ」

明美「ありがとう、頼ちゃん」

虎太郎「え！？　行かないの！？　魔界のエレベーター！」

明美、頼、無視。腕を組んで歩き出す。

虎太郎「ちょ、待って！　置いていかないで！」

○5階建てオフィスビル・外観（朝）

行き交う人々。

○同・4F・事務所（朝）

五月、挨拶をしながら席に着く。

同僚3、同僚4、五月に近寄る。

同僚3「ちよっと、聞いたわよ昨日の喧嘩。  
大丈夫？」

五月、苦笑いする。

同僚3「あの子本当に最悪。入社してからず  
っと溝口さんが面倒みてきたのに。普通、  
先輩の彼氏を寝取ったりする？」

同僚4「（気遣うように）ちよっと……」

同僚3「あ、ごめん……」

五月「ううん、いいの。それよりあの子は？」

同僚4「今日は休みだって」

同僚3「無断欠勤。もうクビでいいのに」

五月「無断欠勤……」

入口が騒めく。

栗原篤（35）、入室。背後に警察官2  
人を連れている。

栗原、五月に歩み寄る。怒鳴り出す。

栗原「お前、萌絵に昨夜何かしただろ！」

五月「は？ 何かってー」

栗原「とぼけるなよ！ 昨夜バーで揉めてたって聞いてる！ 萌絵はそれから家に帰っていい！ 連絡がとれないんだ！ お前が何かしたに決まってる！」

事務所内、騒めく。

五月「ちよっと待ってください！ 違う！

私は知りません！」

警察官、五月に任意同行を求める。

同僚達、遠巻きに五月を見る。

五月「待ってください！ 私は知らない！」

○バー・カーマデーヴァ・カウンター（夕）

カウンターに座り煙草を吸う明美。

明美「で、ここに来たってわけ？」

海堂慎一郎（35）、明美の隣に座る。

芝恭一（30）、海堂の後ろに控える。

海堂「最後に人前で姿が確認できたのがこのバーだからな。随分揉めてたらしいじゃね

えか」

明美「そうね。物凄い乱闘だったわよ。でも小娘はさっさと逃げて行ったし、五月ちゃんの方はその後も私と一緒にいたわ。追いかけてどうこうはできないと思うけど」

海堂「証明できるか？」

明美「できるわよ。あたしがタクシーに乗せただから。頼ちゃん、タクシーっていつもの所から呼んだわよね」

頼、カウンターで頷く。

頼「うん。三橋タクシー」

海堂、芝に目配せする。

芝、頷いて電話をかけ始める。

明美「それより小娘の足取り調べるのが先でしょうよ。家に帰ってないならどっかで酔いつぶれてるんじゃないの？」

海堂「自宅マンションのエレベーターに乗ったところまでは確認が取れている」

明美「それで家に帰ってないってどういうこと？」

海堂「エレベーターから降りた形跡がない」

明美「は？」

海堂、煙草に火を点ける。

海堂「監視カメラはエレベーター内部の他に各階出入口にも付いていた。乗り込んだ所までは内部カメラで確認が取れている。が、そこでノイズが走って、回復後に姿が消えた。出入口のカメラは各階異常なし。降り降りした住民の姿もなし」

明美「それじゃ、エレベーターの中で姿が消えたってこと？」

海堂「そうなるな」

虎太郎、明美の肩越しに顔を出す。

虎太郎「これ、アレだよ姉ちゃん！ 魔界の

エレベーター！」

明美「(がっくりと) まだ言ってる……」

頼「(呆れて) お前いい加減にしろよ……」

虎太郎「だってそうだろ！ きっとこの後、半年位してから餓死した状態で見つかるんだ！ ねえ刑事さん！ 動画撮っていい？」

海堂「だめに決まってるんだろ」

明美「ちよつと待って。餓死ってどういうこと？」

虎太郎「もく！ だから昨日説明したじゃん！ 行方不明になった子は、その後に変な所で見つかるんだよ！」

頼「変な所って？」

海堂「搜索後、施錠したはずの部屋のクローゼットだったり、公園の公衆トイレ、実家暮らしであればその家の物置」

明美「(ぎょつとして) 何それ、マジなの」

海堂「有名な話だろ」

芝「海堂さん、タクシー会社の裏取れました」

海堂「よし、行くか」

海堂、煙草を消して立ち上がる。

明美「ねえ、五月ちゃんはどうなるの？」

海堂「すぐ出られる」

○警察署・正面(夕)

疲れた顔で出てくる五月。

明美の声「五月ちゃん」

五月、顔を上げる。

車の前に立ち、微笑む明美。

運転席に座る頼。

○バー・カーマデーヴァ・カウンター（夜）

明美、五月にグラスを手渡す。

明美「はい、どうぞ」

五月「ありがとうございます」

五月、一気飲みし、大きく息を吐く。

明美「災難だったわね」

五月「彼が……。私が犯人だって言い出し始めて」

明美「浮気男が何言ってるのよ。そんな糞みたいな奴がいる会社なんてさっさと辞めた

ら？」

五月「多分もう解雇だと思う……。彼、社長だから」

明美「（微妙な顔で）あ、そう……」

五月、グラスを両手で握りしめ震える。

五月「それに私も同類だよ……。だって同じことをしてあの人を手にいれたんだから」

明美「……ってことは、あんたも前の女からそのクズ社長を寝取ったってこと？」

五月、小さく頷く。

明美「そんないい男なの？」

五月「(ぼそぼそと) 年収が……」

明美「うん？」

明美、五月に耳を寄せる。

五月「(ぼそぼそと) 年収……」

明美、目を見開いてのけぞる。

明美「(大声で感心して) あんた！ あんた！  
でっかい魚を釣ったわねー！」

五月「(自嘲気味に) それで捨てられたんじゃ意味ないけどね」

頼「釣ったはずが釣られてたってやつ？」

虎太郎「釣った魚は食べて終わり！ 基本だ

よね！」

頼、虎太郎にボディブローを入れる。

明美「ま、それも一つの経験でしょ。人様の

ものに手を出したら自分だっていつか出されるの。勉強になったんじゃない？」

五月、小さく頷く。

明美「じゃあいいじゃない。あんたは更にいい女になったってことよ」

明美、五月の頭を撫でる。

五月「……なんで、なんでそんなに優しいの？」

明美「（微笑んで）いい女だからよ。誰に何を言われようと、あたしはあたしが描く『いい女』でい続けるって決めてるの」

五月「いい女……」

明美「自分の評価を周りにさせちゃ駄目よ。あんたは周りの為に生きてるんじゃないんだから。自分の為に、自分を幸せにする為に生きてるんだから。あんたの評価はあんただけがすべきなのよ。あたしみたいにね」

五月「私の評価は、私が……」

頼、カウンターから五月へチーズとバゲットの盛り合わせを出す。

頼「食べられた分だけ、いっぱい食べて肥え

たらいいですよ」

虎太郎「俺も食べたい！」

頼「（冷えた顔で）空気でも食ってる」

虎太郎「嘘でしょ!？」

五月、笑う。

#### ○警察署・取調室

取り調べを受ける栗原。

栗原の正面に座る海堂、芝。

栗原「（震えながら）なんで俺が疑われるんですか。五月が萌絵に何かしたに違いないんです。俺は被害者ですよ！」

芝「正確には、被害者の交際相手、ですね。

…：今回も」

栗原、ビクツとする。

栗原「し、知りません。俺は何もー」

海堂「では、なぜ貴方と交際する女性達はい

つも行方不明になるんでしょう？ これで

4人目だ」

栗原「それは…：」

栗原、震えたまま俯く。

背後の窓ガラスに朧げに映る女の姿。

丹藤絵麻（25）の霊。

○オフィス街・路上（夜）

虎太郎に手を引かれて歩く明美。

明美「で、なんでこうなるのよ」

虎太郎「だって家にいたって暇でしょ！ た

まにはパーッと遊ぼうよ！」

明美「あたしはいつでも店でパーッとやっ  
てるわよ」

虎太郎「そう言わずにさ！ はい撮るよ！」

虎太郎、自撮り棒で明美とツーショッ

トの撮影。

明美、思わずセクシーポーズをとる。

虎太郎「あ、レンズにヒビが入った」

明美「あんたにヒビ入れてやろうか！」

○オフィスビル・外観（夜）

幾つかのフロアの明かりが点いている。

○同・1F・正面フロア（夜）

ビル内は明かりが点いている。無人。

正面自動ドアは開きっぱなし。

虎太郎、明美、恐る恐る中へ入る。

虎太郎、3基並んだエレベーターの真

ん中を指さす。

虎太郎「ここだよ。一番初めに魔界のエレベ

ーターが出現した場所」

明美「出現？ 全員同じビルで行方不明にな

ったんじゃないの？」

虎太郎「違うよ！ 萌絵ちゃんとかいう子も

自分ちのエレベーターで消えたんでしょ？

魔界のエレベーターは神出鬼没なんだよ」

明美「（呆れて）ああそうですか……」

虎太郎、撮影を始める。

明美、辺りを見渡す。

散乱する改装工事の備品。

明美「改装中なのかしら？ 荷物も置きっぱ

なしだし明かりも点けっぱなし。不用心ね」

虎太郎「休憩中とかじゃない？ それよりちよつと上の階に行ってみようよ」

明美「ええ！？ あんた捕まるわよ！？」

虎太郎「平気平気！」

○同・14F・エレベーター前（夜）

チン、とエレベーターの到着音が響く。

扉が開き、降りる明美、虎太郎。辺りを見渡す。

剥き出しのコンクリート壁。置きっぱなしの資材。各部屋を仕切る壁はない。

明かりはついたまま。無人。

エレベーターの扉が閉まる。

虎太郎「ここが行方不明になった女の人が働いてたっていうフロア。んで、退勤時にエレベーターの中で姿を消したんだってさ」

明美「監視カメラにノイズが走ったとか言ってたわね」

虎太郎「そ。エレベーターの中に1人で乗ってたて、突然ノイズが走って、正常になった

時には姿が消えてたんだってさ」

明美「正面玄関の監視カメラは？」

虎太郎「そっちは問題なく動いてたらしいけど、ビルから出た形跡がなかったみたい。

それでそのまま行方不明。結局誘拐の線も含めて捜査されたけど、その女性は見つからなかった」

明美「なのに半年後に捜索済みの部屋のクロ  
ーゼットから出てきたの？」

虎太郎「餓死した状態だね」

明美「(天を仰いで) どんなトリックよ……」

チン、とエレベーターの到着音が響く。

明美、虎太郎、振り返る。

エレベーターが開く。

頼、出てくる。手には懐中電灯。

頼「五月さんを送ってきたよ。ママ」

明美「ありがと。頼ちゃん」

虎太郎「(信じられない目で見て) お前、一人で乗って怖くないの？」

頼「(平然と) 何が。ああ、あとこれ。調べて

きたよ」

頼、明美にスマホを渡す。

明美「え、これ、事件の被害者の情報？」

虎太郎「嘘！ どうやって！？」

頼、明美に向けて可愛く首を傾げる。

頼「（可愛い声で）秘密！」

明美「（興奮して）かわいい！ 秘密なのね！

わかったわ頼ちゃん！」

明美、頼の頭を撫でる。

虎太郎、呆れた目で明美と頼を見る。

× × ×

スマホを覗き込む明美、虎太郎。

頼「14Fには広告代理店が入ってたみたいだね。んで行方不明になったのはその社員、小坂百合子。こいつが都市伝説の発端みたいになってるけど、でも実際には彼女の前行方不明になった女がもう1人いる」

明美「もう1人？」

頼「うん。名前は丹藤絵麻。失踪時は25歳。

彼女は当時同僚と交際中だったんだけど、

その同僚が他の社員と浮気したのを切欠として失踪。現在まで行方不明」

虎太郎「見つかってないの？」

頼「10年経つけど未だにね。浮気男の方はそれからすぐに退職。寝取った女は同じ会社に住続けたけど、その後に行方不明になった。それが小坂百合子」

虎太郎「待って待って！ 被害者は全員『交際相手を寝取られた子』だよ！ 寝取った子じゃない！」

頼「だから、寝取られたんだよ。そいつも」

虎太郎「はあ？」

頼「寝取って、しばらくして他の女に寝取られて、そんで行方不明になったってこと」

虎太郎「マジかくみんなすごい性欲だね」

頼「お前ほどじゃあねえよ」

虎太郎「なんで！？ 俺の何を知ってるって  
いうの！」

頼「うぜえ」

明美「でもそしたらその男が一番怪しくな

い？ 用済みになった女を始末する、とか。  
よく映画であるじゃない？ 警察もその浮  
気男のことを調べてるんじゃない？」

頼、懐中電灯を辺りに向ける仕草をし  
ながら、視線を明美に向ける。

頼「今まさにね」

虎太郎「どういうこと？」

頼「浮気男の名前は栗原篤。五月さんを捨て  
た恋人」

明美、虎太郎「はあ！？」

○同・エレベーターピット（夜）

暗闇。

萌絵、目を覚ます。

萌絵「え、何、ここ……」

萌絵、錯乱しながら辺りを見渡す。壁  
を触りながら出口を探す。

萌絵「誰か、誰か助けて！ 誰か！」

絵麻（霊）、萌絵の背後に現れる。萌絵  
に手を伸ばす。

萌絵、振り向く。悲鳴を上げる。

○同・14F・エレベーター前（夜）

明美、こめかみを抑えて溜息を吐く。

明美「つまりはこういうこと？ 栗原篤は1人目の女、絵麻と付き合ってる最中に浮気をして、2人目の女、百合子と交際を始めた。それを知った絵麻はショックを受けて失踪。栗原は会社を辞めて起業。そこでちやっかり3人目の女をゲットして百合子を捨てた。そしたら今度は百合子が行方不明になった。んで次に4人目の女に手を出したら、今度は3人目が失踪……」

虎太郎「ややこしい」

頼「本当にな。まあつまり栗原に捨てられた段階で、その女は行方不明になるってこと」

明美「それ、エレベーターが魔界なんじゃないの！  
くてその男が魔界なんじゃないの！」

虎太郎「五月ちゃんって何人目？」

頼「5人目」

明美「（深く溜息を吐いて）あの子もよくそんな男に手を出したわね……。とうか気付かないもんなの？」

頼「案外バレないもんなんじゃないかな？」

栗原は起業と売却を繰り返してるし」

明美「10年間起業を繰り返せる力があるなら、なんでもっと建設的な方向にシフトしないのかしら」

頼「本当にそれ」

虎太郎「じゃあ次は五月ちゃんが失踪するの？」

頼「パターンでいけばそうなんじゃね？」

虎太郎「でも今回萌絵ちゃんが先に失踪してるよね。なんで？」

頼「俺が知るかよ」

明美「でもちよっと五月ちゃんが心配だわ。様子見に行かない？ 頼ちゃん、お家わかるわよね」

頼、頷く。

虎太郎「今から？」

明美「何かあってからじゃ遅いでしょ。ほら  
行きましよ」

明美、エレベーターのボタンを押す。  
扉が開く。

明美、虎太郎、頼、乗り込む。

○同・エレベーター内（夜）

明美、「1」と「閉」ボタンを押す。

エレベーターが降下を始める。

頼、懐中電灯のスイッチを切る。天井  
の灯を見上げる。

頼「でもエレベーターだけ電気が通ってるって  
なんか変な感じだね」

明美「（きょとんとして）え、電気点いてたわ  
よね」

頼「点いてないよ。廃ビルなんだから」

虎太郎「（困惑して）は？ いや改装中だった  
じゃん？ 業者が点けっぱなしにしたんじ  
ゃないの？」

頼「（訝し気に）は？ さっきまでいたところ

も真っ暗だっただろうが」

明美、虎太郎「……は？」

エレベーターがガクンと停止する。

明美、虎太郎、悲鳴を上げる。

明美「ちよっと！　なんで！？　なんでいきなり止まるの！？」

虎太郎「いや、もしかして夜はタイマーで運転を停止するとか？」

頼「この古いビルでそんな機能あるか？」

明美「とりあえず降りましよ！　他の階のボタンとか電話のボタナー」

明美、操作盤があった場所を見る。

ボタンが一つもない。ツルリとしたスチールの壁。

明美「嘘！　なんで！？　さっきあたし押し たわよね！？」

虎太郎「なんでボタンないの！？　ねえ、なんで！？」

虎太郎、ボタンがあった場所を触る。

頼、四方を見渡す。

虎太郎「ま、まさかこれが魔界のエレベーター！？」

明美「(半泣き)嘘でしょ！　ねえちよつと！  
いやあ！　頼ちやくん！」

明美、頼に抱き着く。

頼、明美を抱きとめて虎太郎を睨む。

頼「テメエのせいだぞ、虎太郎……」

虎太郎「(慌てて)いや、いやいやいや！　ちよつと待って！　故障！　そうだ、故障かもしれないし！」

明美「何で故障でさっきまであったボタンが無くなるのよ！　馬鹿でしょ！　あんた馬鹿でしょ！」

虎太郎「ひでえよ姉ちゃん！　いや、でも待って！　これ、もし心霊現象とかだったら、栗原篤を寝取ったことがある奴しか行方不明にならないよね！？」

エレベーターの電気が消える。

明美、虎太郎、悲鳴を上げる。

頼、懐中電灯を点ける。明美を見る。

頼「(愕然と) ……ママ、まさか」

明美「ええ！？ 違うわよ！ 虎太郎！ あ  
んたでしょ！」

虎太郎「俺が男を寝取るわけないじゃん！」

エレベーターがガクン、と揺れる。

明美「じゃあ、もしかして栗原篤に限らず、  
過去に誰かしらを寝取った覚えのある奴が  
いると、こうなるんじゃない？ ……」

虎太郎「(元気に挙手をして) あ、それなら覚  
えある！」

明美、頼「……」

明美、頼、虎太郎を袋叩きにする。

○マンション・五月の部屋(夜)

ベットに寝転がり、スマホを見る五月。

バチン、と音を立てて停電する。

五月「え、何？」

五月、起き上がる。

辺りを見渡す。真っ暗。

窓の外を見る。明かりが点いている。

五月、首を傾げて振り向く。

目の前に絵麻（霊）の顔。

五月、悲鳴を上げる。

○同・廊下（夜）

裸足で走る五月。背後を見る。

ゆっくり追ってくる絵麻（霊）。

五月「誰か！ 誰か助けて！ 誰か！」

誰もいない廊下。エレベーターの扉が開いている。

五月、エレベーターに乗り込む。「閉」

ボタンを連打する。

○同・エレベーター内（夜）

エレベーターの扉が閉まる。

五月、壁に凭れ、座り込む。

五月「（震えながら）もう、なんなの……」

五月、呼吸を整える。扉横を見る。

ボタンが1つもない。

五月「（狼狽えて）え、なんで……」

エレベーター内の電気が消える。

○同・1Fエレベーター前（夜）

無人。

五月の悲鳴が響く。

エレベーターが到着。開く。中は無人。

○オフィスビル・エレベーター内（夜）

虎太郎、扉を叩き助けを呼ぶ。

明美、しゃがみ込んでスマホを見る。

圏外。

明美「（項垂れて）なんでボタンがないのよ」

頼、懐中電灯をあて、操作盤があった

場所を撫でる。

頼「触った感じもないね。最初から無かった

みたいになってる」

明美「虎太郎、あんた扉の開け方知らないの？

色々調べてるでしょ、この心霊オタク！」

虎太郎「（考えて）あー！ 都市伝説だと、特

定の階のボタンを順番に押せば異世界に行

けるっていうのを読んだことあるよ！」

明美「行きたいのは異世界じゃないわよ！」

虎太郎「違うよ！ 戻る時には逆の手順でボタンを押せばいいって書いてたんだ！」

明美「それよ！」

明美、虎太郎、頼、操作盤があった場所を見る。沈黙。

明美「だからボタンがないのよ！ このお馬鹿！」

明美、虎太郎の頭を叩く。

頼「……よく、目では見えないけどスマホには幽霊が映る、みたいな動画とかあるよね」

明美、虎太郎、ハツとして頼を見る。

頼、スマホでカメラを起動する。操作盤があった場所を映す。

スマホの画面上に操作盤が映る。

頼、スマホ画面越しに「1」を押す。

エレベーターが動き出す。明かりは消えたまま。

チン、と音がしてエレベーターが停止。

頼、扉に懐中電灯の光をあてる。

扉が開く。

ぬっと出てくる海堂の顔。

明美、虎太郎「ぎゃー！」

○同・1F・正面フロア（夜）

ビル内は消灯。懐中電灯の明かりのみの薄暗い空間。

腕を組み憤然と立つ海堂。

海堂の背後に立つ芝、警察官2名。

海堂の前に並ぶ明美、虎太郎、頼。

海堂「建造物侵入罪とは、正当な理由なく、他人の建物に無断で入る犯罪のことだ。わかるか？ 犯罪だ」

明美、虎太郎「すいませんでした」

芝、海堂の肩越しに顔を覗かせる。

芝「（偉そうに）謝って許されることじゃないですよ！ 知らないでしょ！？ 建造物侵

入罪が成立した場合の刑罰は――」

頼「（怠そうに遮って）3年以下の懲役又は1

0万円以下の罰金」

海堂、明美、虎太郎、感嘆の声。

芝「(バツが悪そうに)お前！ わかってるんだっつたらなあ！」

頼「(虎太郎を指さして)こいつがやれって言いました」

明美「(虎太郎を指さして)そうです。こいつです」

虎太郎「嘘でしょ！？」

海堂、虎太郎の頭を鷲掴みにする。

海堂「貴様か……」

虎太郎「ちょ！ 待って！ 誤解！ 誤解だ  
って！ だってビルの中が明らかに無人な  
のに明かりが点いてたから、どうしたのか  
なくって思っ……」

頼「だから、明かりは点いてねえって」

虎太郎「ホントだって！ ほら！」

虎太郎、撮影した動画を海堂に見せる。

○虎太郎のスマホの動画（14Fの様子）

真っ暗。

虎太郎の声「ここが行方不明になった女の人が働いてたっていうフロア。んで、退勤時にエレベーターの中で姿を消したんだってさ」

明美の声「監視カメラにノイズが走ったとか言ってたわね」

○オフィスビル・1F・正面フロア（夜）

虎太郎、明美、スマホを覗いて固まる。

頼「（呆れて）だからさっきから言ってるだろ」

虎太郎「なんで！？　ねえなんで！？」

虎太郎、芝の腕を引っ張る。

芝「知らねえよ！　つか引っ張るな！」

明美、額を抑え溜息を吐く。

頼、明美に寄り添う。

頼「ママ、大丈夫？」

明美「もう何が何だか……」

明美、顔を上げて海堂を見る。

明美「そういえば、あんたはなんでここにい

るの？」

海堂「ちようどお前らを探してた。溝口五月が失踪したんでな」

明美「はあ！？」

海堂「2時間程前に署に通報が入った。廊下で悲鳴を上げてる女がいるってな。現場に駆け付けた署員が調べたところ、溝口五月の部屋は無施錠で無人。監視カメラを調べた結果、何者かに追われているような仕草でエレベーターに飛び乗った姿は確認できている」

明美「まさかそこで行方不明になったとか言わないわよね」

海堂「そのまさかだ。内部の監視カメラは急にノイズが走って、回復後には溝口五月の姿が消えていた。あとはいつも通り各階に降りた形跡はなし」

虎太郎「(愕然と)魔界のエレベーターの5人目の被害者が……」

頼「(冷めた目で)お前、厨二病っばいな」

明美、海堂、芝「(残念な目で虎太郎を見て)

あー……」

虎太郎「なんでそんなこと言うの!？」

○同・エレベーターピット(夜)

暗闇。

五月、目を覚ます。体を起こし、辺りを見渡す。

五月「ここ、どこ……?」

隅に倒れる萌絵。

五月、萌絵に近寄る。抱き起す。

五月「川内さん!？ ねえ! 川内さん!」

萌絵、目を覚ます。

萌絵「先輩……? 先輩! 先輩!」

萌絵、震えて泣き出す。

五月、萌絵を抱きしめ辺りを見渡す。

五月「ここはどこ?」

萌絵「(泣きながら)わからない! わからない

いんです!」

萌絵、震える。

五月、自分のフリースを萌絵に着せる。

五月「後ろにいなさい」

五月、立ち上がり壁を叩く。助けを呼ぶ。

○同・1F・正面フロア（夜）

話し合っている明美、海堂、虎太郎、

頼、芝。

遠くから響く声。

明美「ちよつと待って」

明美、辺りを見渡す。

虎太郎「姉ちゃん？」

明美「静かに」

遠くから五月の声が聞こえる。

海堂、エレベーターに駆け寄る。扉に

耳を寄せる。

海堂「この中か？」

明美、扉に耳を寄せる。

五月の声「誰か！」

明美「五月ちゃん！」

虎太郎、頼、エレベーターに駆け寄る。

明美「五月ちゃん！ あなたなの！？」

五月の声「明美さん！？ 明美さん！ そこにいるの！？ 助けて！」

明美「待ってて五月ちゃん！ 今助けるから！」

頼、エレベーターのボタンを押す。動  
作しない。

虎太郎、扉を開こうとする。動かない。

海堂「誰か、工具持ってこい！」

○同・エレベーターピット（夜）

上から聞こえる喧騒。

五月の背中に縋り、震える萌絵。

五月「大丈夫だから。大丈夫、大丈夫」

五月、萌絵の手を握る。

萌絵、五月の手を見つめる。

○10年前・萌絵の記憶

萌絵の手を握る絵麻（25）

萌絵の声「お姉ちゃん」

絵麻、微笑む。

○オフィスビル・エレベーターピット（夜）

萌絵、顔を歪めて俯く。そして驚く。

萌絵の両足首を握る絵麻（霊）の両手。

両足を引かれ、倒れる萌絵。後ろに引

き摺られる。

五月「川内さん！」

五月の目の前に現れる絵麻（霊）。

絵麻（霊）、五月の首を両手で絞める。

絵麻（霊）「彼を、よくも、私の彼を、よくも」

萌絵、体を起こす。絵麻の姿を見る。

絵麻（霊）「私のなのに、私のなのに、奪うな

んて。酷い、酷い、私の篤、私の幸せを、

奪うなんて」

五月、藻掻く。

五月「……冗談じゃないわよ！ あんな糞っ

たれの、何が幸せだって！？ 馬鹿じゃな

い！ あんな奴、もういらぬわよ！」

絵麻（霊）、怒って力を強める。

五月、持ち上げられる。足が浮く。

絵麻（霊）「あんたなんか、あんたなんか、

彼は、渡さない……！」

五月「（苦しそうに）……だから、いらな  
いて、言っただろうが！ あんな奴いなく  
たって、幸せにはなれるんだから！ 私は、  
幸せになってやるんだから！ 誰かに縋ら  
なくたって！ どれだけ年取ったって！  
幸せに長生きしてやるんだから！」

萌絵、五月に抱き着き絵麻（霊）から  
引き離す。

萌絵「やめて！ 離して！」

五月、萌絵、床に倒れ込む。

萌絵、五月を背後に庇う。

萌絵「もうやめてよ！」

絵麻（霊）、五月と萌絵を見つめる。萌  
絵に近付き首を絞める。

五月、ふらつきながら絵麻（霊）を引  
き離そうとする。

五月「やめて、やめて……」

絵麻（霊）、萌絵の首を絞め続ける。

萌絵、泣きながら絵麻（霊）を見つめる。優しく両手に触れる。

萌絵「……あたしだよ、お姉ちゃん」

絵麻（霊）、目を開く。

萌絵「あたし、萌絵だよ、お姉ちゃん……」

絵麻（霊）、動きを止める。両手を離す。

五月、萌絵を抱き寄せる。

萌絵、咳き込む。泣きながら絵麻（霊）を見る。

絵麻（霊）「（呆然と）萌絵……？ 萌絵、萌

絵、なんで、ここに」

萌絵「（叫ぶように）……探してたからじゃん！ ずっと！」

五月、驚いて萌絵を見つめる。

萌絵「だからあんな胡散臭い人やめろって言ったのに！ 10年も帰ってこないから！ だから、だからあたしが探してあげてんじやん！ みんな待ってるんだよ！ 父さん

も母さんもあたしも！ 待ってるんだよ！」

絵麻（霊）、呆然とする。

萌絵「ずっと！ ずっと！ 探してたんだ

よ！ 絵麻お姉ちゃん！」

萌絵、蹲って号泣。

絵麻（霊）、萌絵に近付く。

五月、萌絵を庇う。

絵麻（霊）、泣いている。

絵麻（霊）「……萌絵、萌絵、ごめん。ごめん、

ね。萌絵……お姉ちゃん、ごめんね」

絵麻（霊）、萌絵に覆いかぶさり、泣き

ながら消える。

○同・1F・正面フロア（夜）

エレベーターの扉をこじ開ける芝、警

察官。扉が開く。

明美、虎太郎、海堂、中を覗き込む。

○同・エレベーターピット（夜）

頭上から懐中電灯の光が差し込む。

中を覗き込む明美、虎太郎、海堂。

海堂「無事か！」

明美「五月ちゃん！」

座り込む五月と萌絵。

五月、懐中電灯の明かりを手で遮る。

五月に抱き着いて泣く萌絵。

虎太郎の声「うっわ！」

五月、怪訝な顔をして虎太郎を見る。

視線の先を追う。

ピットの隅に横たわる白骨遺体。首に

かかったロープ。

○バー・カーマデーヴァ・カウンター（夜）

賑わう店内。

カウンターに座り新聞を読む明美。

隣に座る虎太郎。

明美「山間部で被害者の毛髪の一部と、当時

持っていたバックが発見、ですって」

虎太郎「栗原が殺害を自供したの？」

頼、カウンターでグラスを磨きながら

口を挟む。

頼 「自供と言うか自爆というか。そんな感じ  
だったららしいよ」

明美 「自爆？」

頼 「そ。10年前、痴話喧嘩の末に恋人だっ  
た丹藤絵麻を絞殺。死体を山間部に埋めた。  
その死体が今になって何故か昔勤めてたビ  
ルのエレベーターピットから発見された。  
本人に聞いたたら山に捨てたはずだって大騒  
ぎしたらしい」

明美 「それで言われた場所を掘り返したら本  
当に被害者の所持品が見つかった、と。馬  
鹿ね、こいつ」

虎太郎 「まあ、思わずぼろっと言っちゃう気  
持ちもわかるよ。だって未だに信じられな  
いもん。死体だけ戻ってきたなんて」

明美 「そうねえ」

虎太郎 「そんなことよりさあ。あの折角の撮  
影動画が全く使い物にならないんだけど、  
どうすればいい？」

虎太郎、項垂れている。

頼「真っ暗で何も映ってねえって言ってたか」

明美「(呆れて) あんた、気を付けなさいよ。

ずっと見てたらお化けの顔が浮き出てくる

とかあるんじゃないの？」

虎太郎「あ、この動画、姉ちゃんに送っとく

からチェックしてよ」

明美「ふざけんじゃないわよ！」

店のドアベルが鳴る。

五月、萌絵、入店する。

五月「こんばんわ」

萌絵「こんばんわ！」

明美「あら、いらっしやい。珍しい組み合わせ

せね」

五月「(笑って) そうなの」

萌絵、嬉しそうに五月に腕を絡ませる。

萌絵「今日は挨拶にきました！」

虎太郎「挨拶？」

萌絵「実はあ、隣にお店開くことになったんです！」

明美、虎太郎「はあ！？」

五月「（照れ臭そうに笑って）実は友達に誘われてね。店を持たないかって」

萌絵「（嬉しそうに）五月ママってすごいんですよ！　顔が広いから色んな所から声が掛かってて！　そんで萌絵と一緒にいたいって言ったたら、じゃあ来ればって！」

明美「（呆然）あ、え、そう……」

五月、明美に握手の手を伸ばす。

五月「私も、明美さんみたいにいい女になりたい。だから、これからはライバルとして、よろしくお願いします」

明美、驚く。その後になまりと笑う。

明美「こちらこそ！　負けないわよ！」

明美、五月と握手をする。

萌絵「では、そういうことで！　お客さん貰っていきま〜す！」

萌絵、店内の客達に声を掛けていく。

萌絵「今日は私達のお店で飲みませんか！　オーブンしたばかりなんです〜！」

明美「はあ！？ ふざけんじやないわよこの雌猫が！」

頼、天を仰いで溜息を吐く。

五月「萌絵、搾り取っておやり」

萌絵「はい！ ママ！」

明美「あんた達って子はく！」

明美、萌絵を捕まえようと追いかける。

ドアベルが鳴り、入店する海堂、芝。

海堂「今日は一段と賑やかだな」

明美「あら、また来たのね」

海堂「今回は仕事じゃない」

芝「一段落ってことで来ちゃいました」

萌絵、海堂に走り寄る。腕に抱き着く。

萌絵「ああ！ あの時のお巡りさんじゃないですかあ！ どうです？ 今日は私達のお

店で楽しむっていうのは」

海堂「（無表情で）……そうだな、たまには」

頼と目が合う海堂。

海堂「（ぎこちなく）いや、俺は、いや……こ  
つちで」

海堂、萌絵の手から逃げて頼の前のカ  
ウンター席に座る。

頼、怪訝そうに首を傾げる。

萌絵「じゃあ私はこっち！」

萌絵、芝に腕を絡ませる。

芝「(ショックを受けて) じゃあって何!？」

明美「ええい! おやめ! 小娘が!」

虎太郎、五月にすり寄る。

虎太郎「あの、あの、俺も、行こうかな?」

五月ちゃんのお店に」

五月「(真顔で) いくら出せる?」

虎太郎「え、ちょ、五月ちゃん!？」

海堂「(呆れて) ……賑やかすぎるな」

頼「まあ、いいんじゃないねえですか」

海堂「(笑って) まあな」

明美、萌絵、芝を奪い合う。

虎太郎、五月に縋る。

頼、海堂、飲む。

賑やかな店内。

(完)